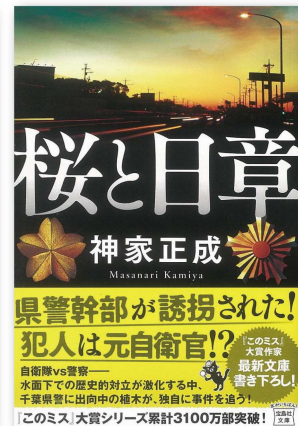


深山の桜 掌編

神家正成



次作『七四』と次々作『桜と日章』も、宝島社文庫から好評発売中です。同一の世界観の物語で幾人か同じ登場人物が出てきます。

各作品の作中時間と舞台は、『深山の桜』が、2014年2月、アフリカ南スーダンで国際連合平和維持活動中の自衛隊宿営地。『七四』が、2015年3月、静岡県富士学校と東京。『桜と日章』が、2017年4月、千葉県柏市です。

どの作品から読んででも楽しめます。よろしければ読んでみてください。

※ この冊子に収録されている掌編は、『深山の桜』読後に、お楽しみください。



アフリカの桜

※ この掌編は『深山の桜』単行本時の、
げみ様の右の装画を見て、一気に浮かんだ
ものです。単行本の帯を取るとアフリカの
桜が咲いています。



「最先任、何、たそがれてるんですか？」

目を細めながら、アフリカの夕陽を見ている亀尾忠二に、杉村泰悌は声を掛けた。「ああ……」亀尾の声は珍しく憂いを含んでいた。「きれい、だな……と」

二人の本日の任務は、文民保護エリア周辺の状況偵察だった。夕陽を物憂げに眺める亀尾の姿は、杉村と同じ恰好だ。戦闘服に重い防弾チョッキ、戦闘靴、国連の青いカバーを付けたハハ式鉄帽を被り、右手には八九式5・56ミリ小銃を握っている。「珍しいですね。最先任がそんなセンチメンタルなことを言うなんて。似合わないですよ」口の端が思わず上がった。「それに、自分は夕陽より朝日のがいいですね。何か、こう、これから始まるんだって気がして」

亀尾は杉村を一瞥して、鼻を鳴らした。

「お前も、俺くらいになれば分かる。夕陽の美しさが」

「また、年寄りくさいことを……。定年が近いといっても、まだまだ人生は長いじゃないですか。そういえば、最先任は、定年後、何をする予定なんですか」

夕刻の穏やかな風が、頬を撫でる。

亀尾は夕陽をしばらく黙って見ていたが、緩やかに息を吐いた。

「お前は日本に戻った後、どうするんだ」

質問に質問が返ってきた。戸惑ったが、何を聞きたいのかは分かっている。

「ええ、どうしましよかね……」率直な想いを返した。このまま桜星の重みを背負いながら自衛官を一生の職業とするのか、別の道を選ぶのか、まだ答えは出ていない。

亀尾も杉村も、沈みゆくアフリカの太陽を黙って見つめた。

今日、乾期の時期としては珍しく、まとまった雨が降った。木々も恵みの雨を受け止めるかのように、葉に水滴をまとっている。大地に溢れた水が、夕陽の光を受けて赤く輝いていた。空も大地も朱に染まり、二人を包んでいた。

「アフリカの太陽から見れば、人間なんて、ちっぽけな存在なんでしょうね……」

思わずの愚痴が零れた。亀尾は言葉の真意を探るような視線を向けてくる。

「自由に……なりたいです」伝わらぬであろう想いを呟いた。

亀尾は黙って杉村の目を見てくる。瞳が朱く染まっている。瞳の中で朱い夕陽が揺れていた。

やがて、亀尾は息を軽く吐いた。

「さあ、行くぞ。来週からは第二文民保護エリアの造設状況の確認だ。忙しくなるぞ」

——いつもと変わらぬ日々が、これからも続くのだろうか。

杉村は大きく息を吸った。アフリカの大地の素朴な太古の匂いに、潤いを得た木々の命の息吹の匂いが混ざる。

轍が夕陽に向かって、真っ直ぐにどこまでも伸びていた。溝に溜まった水も朱く染まり、遙か彼方まで、行く先を示すかのように続いている。

息を吐き、夕陽に別れを告げた。車に戻ろうと振り向いた瞬間、ぬかるみに足が取られた。よろけて、側にあった木に体がぶつかった。

水滴を含んだ木の葉が揺れて、零れ落ち、風に舞った。

——桜が、舞い上がった。

目前の光景に杉村は息を、呑んだ。水に濡れた木の葉が夕陽の光を浴び、桜色に輝いた。春風に舞い踊る日本の桜吹雪が、アフリカの空に描かれた。

「——さ、最先任、さ、さくらが」上擦った声が出た。

「何、言っただ、お前。アフリカに桜が——」

疑念の声とともに、顔を上げた亀尾も声を失った。

桜が二人を包んだ。二人の頬をアフリカの夕陽が優しく照らす。

誰にも顧みられることのないアフリカの大地に——桜が、咲いた。

二人は舞い散るアフリカの桜を、いつまでも、見つめていた。

エアメール



「礼さん、先にケーキ、食べたでしょう？」

甲斐和美は冷蔵庫の扉を開けたまま、棘を含んだ声を出した。視線の先には、評判のケーキ店の箱があり、中には寂しげにチーズケーキが一つだけ残っていた。

「んっ、知らないわよ、そんなの。証拠はあんの、証拠は」

中央警務隊の事務室の自席で書類仕事をしていた植木礼三郎からは、甲斐より大きな声が返ってきた。こちらを見ようともしない。植木を睨んで、甲斐は小さくため息をついた。

「せっかく一緒に食べようと思っていたのに、何でいつも先に、食べるんですか」

「だ、か、ら、知らないわよ、チーズケーキなんか食べていないわよ」

植木の声に、甲斐は口の端を上げた。冷蔵庫の扉を閉め、植木の机に向かう。

午後の緩んだ空気が流れている事務室に、黒い短靴の音が響く。室内は甲斐と植木の二人だけだ。

他の警務隊員たちは、明日行われる「平成二十六年度自衛隊殉職隊員追悼式」の予行に参加していた。今年は南スーダンでの殉職者を含む十二柱の御霊が祀られる。

踵で大きな音を出して植木の机の横に立った。

陸上自衛隊の濃緑色の制服姿の植木は、相変わらず俯いたまま、みみずがのたうち回ったような汚い字を連ねている。回りには書類や封筒が乱雑に積み重ねられていた。縁の薄い白い陶磁器のコーヒーカーップが場違いに浮いている。

「ケーキ、美味しかったですか」

いたずらをした子供を咎めるような口調でゆっくりと、もう一度聞いた。

「だから、チーズケーキなんて食べていません。失礼よ、あんたっ」

笑みが零れる。

「チーズケーキだと、何で知っているんですか」

植木の肩の階級章が揺れた。桜星が光を反射する。植木の手が止まる。

コーヒーの残り香が漂ってきた。

壁時計の音が室内に響く。

突然、植木は立ち上がり、甲斐を見た。眉が小刻みに揺れている。

「用事を思い出したわ」宣言するかのように高々と言い、部屋を出て行くこととする。

「ちよっと、礼さん」甲斐の投げ掛ける声を無視して、植木は驚くような速さで外へ出て行った。

その後ろ姿を見て甲斐は首と肩を下げ、全身でため息をつく。

勝手気ままな上官は、時々わざと嫌われるかのような行為をする。女性に好かれるのを恐れているかのようだ。

眼下のおよそ自衛官のものとは到底思えない乱雑な机の山を、整理整頓したくなる衝動が湧いてくる。コーヒーが少しだけ残ったカップを持ち上げ、給湯室に向かおうとする。

書類の山が崩れた。慌てて片手で押さえる。

視線の隅に、青と赤の縁取りのエアメールが見えた。同じ人間の文字とは思えない、美しい英語の筆記体が書かれている。宛先はカンボジアだ。

目を細め、封筒を見た。

息を呑むと同時に、笑みが零れた。

宛先の氏名には「Chuji Kameo」と記されていた。

アフリカの緑



親愛なるおじさんへ

おじさんと別れてから、もう二年も経ったなんて、何か信じられないや。おいらは元気だよ。でも、おじさんに手紙を出しても返事は返ってこなかったし、もうおいらのことなんか忘れて、どこかへ行っちゃたんじやないかと思ってたよ。

この間来た、おじさんからの初めての手紙、嬉しくてお母さんと学校の友達にも見せたんだ。お母さんはゆっくりと何度も読んでから、よかったねと笑ったよ。

あ、そう、お母さんも元気だよ。コニヨコニヨマーケットの外れにある食堂で働いているんだ。おいらが自衛隊の人たちを連れて行くから商売繁盛だつて店主がいつも褒めてくれる。

ジュバの街は相変わらず騒がしいよ。学校の先生はいろいろと難しいことを言うけど、最後には、世界中から多くの国の人たちが助けにきてくれるから、君たちは一生懸命勉強しなさいって言うんだ。おいらは大きくなったら、おじさんのように、世界のどこかで困っている人たちを助けることができる人になりたいと思ってる。

だから苦手な数学だつて頑張ってるよ。学校の授業はあつたりなかったりだけど、学校に行かない日は自衛隊のキャンプで日本語を教わってるんだ。

最初は杉村の兄ちゃんや、さつきさんに教わってたけど、二人とも日本に帰っちゃったから、今は新しいサージャン・メジャーに教わってる。

おじさんと同じように怖い顔をしてるけど優しいんだ。おじさんが話してた「桜」の花の写真を何枚も見せてもらったよ。とてもきれいだね。おいらもいつか日本に行つておじさんと一緒に「花見」をしたいな。

日本では桜の季節だけど、こっちではそろそろ雨期のシーズンが始まるよ。雨期はあちこちがぬかるんで大変なんだけど、雨が降ると砂漠の大地が一面の緑になってとてもきれいなんだ。アフリカの大地は乾期の時はただの茶色の砂漠だけど、雨期になると魔法が掛かったように辺り一面が緑に染まるんだ。おいらは桜も好きだけど、やっぱりアフリカの緑がお気に入り。おじさんにも見せてあげたいよ。

そう、そう、この間、日本から新聞記者の人が来たんだ。おじさんのことを、やら根掘り葉掘り聞いてきたよ。

おいら、おじさんに書いてもらった「勇」の漢字と、カンボジアの桜さんから貰った、だいぶちびた鉛筆を自慢げに見せたんだ。そしたらその人、その二つを見て急に黙り込んで俯いちゃった。

何か変なこと言っちゃったのかと思って、顔を覗きこんだら、目が真っ赤だった。突然、おいらのことを抱き締めてきたんだ。

おいら何だか恥ずかしくなって、「やめてよ」って言ったたら、その人は笑っているような泣いているような顔をして頬を寄せてきたんだ。

帰る時にその人の名前を聞いたら、少し遠くを見るように考えた後、「桜子よ」

って笑った。桜の名前なんて素敵だねって言ったたら、もう一度抱き締めてくれた。何だかおじさんと同じような匂いがしたよ。

ああ、明日は朝が早いんだ。自衛隊のみんなと新しくできた孤児院に行くんだ。遊びに行くんじゃないよ。これでもお手伝いを頼まれてるんだ。偉いでしょ。

必ず返事をちょうだいよ。まだ日本語では難しいけど、いつか日本語で手紙を書くね。楽しみにしててよ。それじゃ、また。

アフリカの空の下で

イサムより

神家正成（かみや まさなり）

※本書の感想、著者への励ましなどは、下記ウェブサイトやTwitter、
Facebook、noteまでお気軽にどうぞ。

<https://kamiya-masanari.com/>

https://twitter.com/Kamiya_Masanari

<https://www.facebook.com/Kamiya.Masanari>

https://note.mu/kamiya_masanari

みやま さくら しやうへん
深山の桜 掌編

2015年 3月18日 第1刷発行

2016年12月30日 増補版 第5刷発行

著 者：神家正成

発行人：神家正成

発行所：株式会社神家正成

組 版：株式会社神家正成

印刷・製本：神家正成株式会社

本書の無断転載・複製はどうぞ自由に。喜びます。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

© Kamiya Masanari 2016 Printed in Japan

First published 2015 by Kamiya-Masanari Co., Ltd.

ISBN 978-4-1115-5342-6